

# 賀川豊彦の平和思想について

— 社会活動と思想の変遷を中心に —

聶 爽

「福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要」第二〇号抜刷

2022（令和4）年12月



# 賀川豊彦の平和思想について

## — 社会活動と思想の変遷を中心に —

聶 爽

### 序

#### 1. 研究の背景

賀川豊彦（1888年7月10日－1960年4月23日）は、大正・昭和期のキリスト教社会運動家であり、社会改良家である。豊彦はキリスト教における博愛の精神を実践した「貧民街の聖者」として日本以上に世界的に知名度が高く、現代の「三大聖人」として「カガワ、ガンジー、シュヴァイツァー」と並び称された。また、彼は戦前日本の労働運動、農民運動、無産政党運動、生活協同組合運動、協同組合保険（共済）運動において、重要な役割を担った人物であり、日本農民組合を創設し、「イエス団」の創始者となった。ノーベル文学賞や平和賞にノミネートされたこともある。しかしながら、これほど注目を浴びていたにもかかわらず、戦後70年以上経った現在では、豊彦は人々の記憶からフェードアウトしてしまっている。残念ながら、現在日本の若者の間に、豊彦のことを知っている人はほとんどいないのが現状である。

1950年代まで、日本だけでなく、アメリカや中国（特に香港、台湾）などの新聞や雑誌にも、豊彦に関する記事は多く載せられ、彼の翻訳書などが残されていたが、これらの資料を用いた豊彦の活動に関する研究は十分になされていないと言うのが現状である。彼の母国日本でも同様で、現在では上述の如く豊彦に対する関心が少なくなり、彼に関する著書や論文も少なくなっている。このように、日本及び中国において、賀川豊彦に関する研究、すなわち、豊彦の平和活動はどのように行われていたのか、豊彦という人物はどのように評価されていたのか、豊彦の平和論はどのように重要視されたのか、

どのように変化していったのか等に関する研究は、管見の限りほとんどないのである。

21世紀において、戦争と平和の問題、貧困問題、貧富の格差の拡大など様々な課題が迫ってきている。これらの課題を乗り越えるために、賀川豊彦が世界に広げた平和論、助け合いの精神、共同組合活動などにあらためて注目し、深く学ぶことは大いに意義深いと考える。本論文は、今から百年前へ遡った時点から、豊彦の平和思想と活動の変遷を改めて概観しながら、探求を進めてゆくこととする。

## 2. 先行研究

賀川豊彦への注目度が低くなっている現在はさておき、豊彦に関するこれまでの研究では、日本国内において質の高い研究論文と著書が多数存在している。

米沢和一郎(1946年-)は、Realistic Pacifistとしての豊彦の満州事変(1931年)後の侵略謝罪、及び、1934年中国での侵略謝罪の実態に焦点を絞り、国家的罪悪である軍事主義による侵略行為と対峙することや、「国家的罪悪を分担」した豊彦の中国への侵略謝罪について論じた<sup>1</sup>。しかし、豊彦が確かに平和主義的な傾向にあったが、首尾一貫性と堅固さに欠けていること(特に太平洋戦争中の平和思想の変化)について米沢は言及していない。

小南浩一(1957年-)は、豊彦の個人雑誌『雲の柱』(1922年1月-1940年10月)、イエスの友会の機関誌『火の柱』(1924年-1944年)を中心に、十五年戦争(1931年-1945年)下における豊彦の思想と行動を分析している。その分析の視点は次の二点である。

- ①1930年代の豊彦の平和論及び平和構造がいかなるものであったかを検討する。
- ②1940年代、特に太平洋戦争下における豊彦の言動を分析する。

---

<sup>1</sup> 米沢和一郎「Realistic Pacifist賀川豊彦と中国」明治学院大学キリスト教研究所紀要(38)、2006年、73-101頁。

また小南は、豊彦の『愛の科学』の中国語版（1934年6月刊行）の「著者新序」や、盧溝橋事件（1937年）による日中戦争（1937年－1945年）勃発直後の「涙に告ぐ」と題する豊彦の詩を引用し、豊彦が日本軍の中国侵略のために中国人に謝罪したことなどを紹介し、豊彦の戦時下の行動とその発言を分析している。小南の分析対象には、豊彦の米国から帰国の際の太平洋上での『心痛める子供』という詩も含まれる。

私は再び心痛める子供になり。  
日本の罪悪の重い荷を背負い  
一つ破れた靈魂を持ち  
中国及び世界の許しを求め  
私は再び気を揉む子供になった。<sup>2</sup>

しかし、小南は豊彦における戦争認識の変化についての言及が不十分である<sup>3</sup>。

河島幸夫（1942年－）の著書『賀川豊彦と太平洋戦争 戦争・平和・罪責告白』は、当時の新聞などの資料や当時の各新聞に掲載された豊彦の話や経歴を通じて、太平洋戦争中の豊彦の戦争に対する態度の変化の原因ときっかけを分析している。しかし、河島の考察は太平洋戦争に留まっており、豊彦の平和思想の全体像を掴めていない<sup>4</sup>。また、浜田直也（1953年－）の著書『賀川豊彦と孫文』にも、豊彦と孫文（1866年11月12日－1925年3月12日）との関係を中心に、豊彦と蒋介石（1887年10月31日－1975年4月5日）、宋美齡（1897年3月4日－2003年10月24日）、胡適（1891年12月17日－1962年2月24日）、誠静怡（1881年－1939年11月15日）、陳独秀（1879年10月9日－1942年5月27日）などといった民国期（1912年－1949年）の著名な人物との関係を明らかにしている。しかし、浜田は、豊彦の中国での活動を考察する際に『東方雑誌』（1904年－1948年）、『大公報』（1902年－）など中国で発行された新

<sup>2</sup> 『一个痛心的孩子-詩』（『中華婦主』1932年第126期19頁）

<sup>3</sup> 小南浩一、『賀川豊彦研究序説』、緑蔭書房、2010年、167-178頁参照。

<sup>4</sup> 河島幸夫、『賀川豊彦と太平洋戦争—戦争・平和・罪責告白』、中川書店、1994年。

資料を用いておらず、豊彦の具体的な中国での平和言論や活動をについてはほとんど言及していない<sup>5</sup>。中国で刊行された新聞と雑誌の中に出てくる豊彦に関する資料は、豊彦に対する未だに乏しい「資料考証に基づく客観的な科学的研究」の重要な資料である。

中国側では、兵庫大学大学院の庾凌峰（1991年－）が、『戦前・戦中・（1920年—1945年）の中国における賀川豊彦の受容に関する調査』<sup>6</sup>において、主に豊彦の中国における受容問題を考察し、豊彦と中国との戦前・戦中関係の変化について分析している。しかし、庾の視点は、中国側からのみに置かれており、豊彦の平和論の理解に少し偏りが見られる。また、劉家峰（1970年－）の『賀川豊彦と中国』では、豊彦と中国の関係、キリスト教社会主義者としての豊彦、キリスト教平和主義者としての豊彦が論じられている<sup>7</sup>。劉は、豊彦の思想は、中国教会にキリスト教と社会運動について考える上での理論的資源を提供し、当時の教会が積極的に社会問題に対応しようとする需要に合致したと指摘している。しかし、劉は、豊彦の思想以外に、実際に中国社会に具体的な行動が起こしていなかったについて全く触れていない。一方、陶波は、修士論文である『相互扶助と平和を追求する——太平洋戦争前後の賀川豊彦を詩論する』の中で、主に豊彦と米国の元大統領ルーズベルト（1882年—1945年）との関係を分析し、平和への願いが経済利益、軍事戦略及び領土主権などの重大な現実的な課題と衝突する時、豊彦のような宗教家は政治や国際的な平和への影響が限られていると結論付けている。<sup>8</sup>

### 3. 研究目的・研究方法

上述の先行研究から分析すると、賀川豊彦に関するこれまでの研究は、豊彦の個人的な履歴や日本と国際における影響力についてが主であり、平和思想を主張してきた彼が、太平洋戦争勃発後戦争支持への態度に逆転し、反戦

---

<sup>5</sup> 浜田直也、『賀川豊彦と孫文』、神戸新聞総合出版センター、2012年。

<sup>6</sup> 庾凌峰、『戦前・戦中・（1920年—1945年）の中国における賀川豊彦の受容に関する調査』、2020年

<sup>7</sup> 劉家峰、『賀川豊彦と中国』、東アジア文化交渉別冊、2010年、45-60頁。

<sup>8</sup> 陶波『相互扶助と平和を追求する——太平洋戦争前後の賀川豊彦を詩論する』（修士論文）、復旦大学、2011年。

思想の転向を測ったことについては、ほとんど言及していないことがわかる。また、日本人研究者の著作や研究論文では、豊彦に関する論述は日本の観点から分析することが多いが、中国の観点から彼の反戦思想を分析する文章は非常に少ない。

本論文は、豊彦の生涯を概観しながら、太平洋戦争前後の豊彦の周囲環境・その際に起きた重要な国際事件を考察し、豊彦の行った事業・経験・成長などについて日本の研究者とは異なる中国人の視点も合わせながら考察することで、豊彦の平和論の全体像を明らかにするものである。その際、本論文では、中国と日本の新聞、著書、研究論文に基づき考察をすすめる。主に一次資料として、賀川豊彦全集、豊彦本人の手紙、論文を、また、二次資料として、日本と中国の研究者の著書や論文（柴金璐と陳景彦著『19世紀末20世紀初頭のアメリカの日本移民政策の変化』、程文明の『近代日本の対外侵略拡張史から見た太平洋戦争の性質』など参照）、中国で発行された新聞（『東方雑誌』、『大公報』）からの記事、また、中国人研究者が書いた当時様々な事件の背景に関する論文、など多様な資料<sup>9</sup>を通じて、豊彦の平和論の変遷をより具体的に分析していく。

## 第一章 平和思想の萌芽期

### 1. 賀川豊彦について

賀川豊彦は神戸に生まれた、大正・昭和期におけるキリスト教社会運動家、平和主義者、労農指導者、社会改良家、作家であり、彼の功績から博愛精神「スラムの聖者」と呼ばれている。

第二次世界大戦（1939年－1945年）前、豊彦が、日本の労働運動、農民運動、生活協同組合運動、日本農民組合の創設者でありながら、無産政党運動と消費協同組合運動に多大な貢献をしていたこともあり、欧米ではシュバイツァー（1875年－1965年）、ガンジー（1869年－1948年）、豊彦を「世界の三大聖人」とする評価が一般的だった。また、1930年代における世界的に最も

---

<sup>9</sup> 具体的には修士論文最後の参考文献一覧表を参考する。

有名な日本人として認められていた<sup>10</sup>。

## 2. 家庭環境

豊彦の父、賀川純一（1857年－1892年）は神戸の回漕業者で、祖父（生没年不詳）は庄屋を統括する大庄屋であった。祖父は富裕であったが、男子がいなかったため、隣の村から15歳の純一を引き取った。純一は平民だったが、県内の士族指導者との交流が深めるにつれ、徐々に卓越した才能を発揮し、政治的にリーダーシップをとるようになった<sup>11</sup>。1874年（明治7年）、士族を中心に自由民権運動を目的とした「自助社」を自宅で結成したが、「自助社」が「立憲体制樹立の詔」（1875年）を解説した文書「通論書」が政府の立場に反するものであったため、「自助社」は解散させられた。

才能があり容姿端麗な芸妓であった豊彦の母、菅生かめ（芸名益栄）（生没年不詳）は、純一の愛人として身請けられたが、愛人であったため、賀川家に認められていなかった。豊彦の神戸時代、彼女が、母としてまた主婦として、豊彦と純一の世話をしていたが、豊彦が4歳の時、純一が病気で亡くなり、翌年かめも他界した。幼い頃の豊彦には強い衝撃であった<sup>12</sup>。

## 3. 賀川豊彦の幼年期

前述のように、豊彦は愛人の子であり、両親が早逝したこともあり、幼年期の彼の生活は他の子供のそれとは大きく違うものであった。両親の死後、姉とともに徳島の賀川家に帰り、義母である純一の正妻と一緒に暮らしていた。純一は家を離れてから家族の世話をしたことがなく、祖母の世話はいつも正妻がしていた。純一の生前、正妻は豊彦を養子として認めたが、彼女は純一を恨んでいた。また、豊彦が愛人の子であったこともあり、義母と豊彦は、うまく付き合うことができなかった。

豊彦が著した「私の少年時代」<sup>13</sup>によると、彼は10歳まで義母とほとんど

---

<sup>10</sup> 三久忠志、『賀川豊彦伝—貧しい人のために闘った生涯』、文芸社、2020年、5頁参照。

<sup>11</sup> 賀川豊彦記念出版会会員、『賀川豊彦入門』、賀川豊彦記念出版会、2014年、12-14頁参照。

<sup>12</sup> 同上、15-16頁参照。

<sup>13</sup> 兩宮栄一、『青春の賀川豊彦』、新教出版社、2003年、76頁参照。

話したことがなかったようである。それだけでなく、義母は彼の母の悪口を言い、純一に対する恨みを訴えることが多かった。豊彦は、4歳から10歳までの6年間、自分では何もできないため、よく一人で隠れて泣いていた。このような生活環境の下で、彼は毎日鬱々として暮らしていた。しかし幸いにも、豊彦の祖母は彼を賀川家の後継者として育成し、彼を禅寺に行かせ、儒教や四書五経を学ばせた。豊彦は、本を読むことでようやく少し安らかになったのかもしれない。また、義母の冷淡さと祖母の厳格さという環境下で孤独を感じながら傷ついた心も、自然の風景によって癒されていたようである。

とは言え、自然の風景がどんなに良くても、家族や村の人から受けた仕打ちが理解できなかったこともあった。豊彦が11歳、高等小学校3年生の時のことである。彼は傘で隣の村の小学校の子供を刺して死なせるところだったとされた。村の人に濡れ衣を着せされたこの事件の影響を受け、村へ帰る気を失くした事がある。さらに、彼が15歳の時、賀川家が倒産し、村民に陰口を一層叩かれることとなった。このような子供時代の経験から、彼は鋭い観察により世間の悪や残酷を見抜くような子供になっていった<sup>14</sup>。

賀川家が倒産してから生活は苦しくなり、彼は学費を払うことができなくなった。そのため、叔父の森六兵（生没年不詳）の家に引っ越し、家庭教師として生計を立てた<sup>15</sup>。

1900年（明治33年）、豊彦は歴史ある優秀な人材を集めた寄宿制学校、徳島中学に入学した。聡明で財力のある同級生を前に、村から出てきた豊彦は自信がなく、その雰囲気になんて耐えられずにいたが、翌年、徳島中学の片山政吉（生没年不詳）という英語教師の英語塾に行くことになった。

#### 4. 入教のきっかけと生命の光

賀川豊彦の家が倒産したため、保護人であった兄（生没年不詳）は韓国へ行ったが、そこで亡くなった。幼少時代の豊彦は、総じて、家族の愛情を得られず心を傷つけられた子供であったと言える。片山政吉の英語塾に入学後、片山を通じて当時徳島教会にいたローガン博士（1874年－1955年）、マ

---

<sup>14</sup> 賀川豊彦記念出版会会員、前掲書、24頁参照。

<sup>15</sup> 同上、28頁参照。

ヤス博士（1874年－1945年）と知り合った。豊彦が教会へ行ったのは友達に紹介されたからであった。最初ローガン博士のキリスト教概要の講義を聞き、2、3回聞直してみたが、キリスト教には好感が持てなかったため、すぐにローガン博士の講義を聞くことはやめた。しかし、その後英語で解説される「創世記」の講座が開かれた際、ローガン博士の新鮮で美しい英語と話ぶりが豊彦を引きつけた。また、二人の博士家の食堂には、豊彦の指定席があり、豊彦がかつて経験したことのない「家」の雰囲気、孤独であった豊彦の心を慰めてくれもした。ローガン博士は豊彦に英語を教え、彼の英語は飛躍的に進歩した。また、豊彦はローガン博士から一冊の貴重な本をもらった。イエスの生涯について記載されている本であった。イエスの言葉は豊彦を励まし、ローガン博士の家での生活は、学校とは全く違う感じを与え、人生における新たな希望を豊彦に与えた<sup>16</sup>。

ローガン博士、マヤス博士、片山先生の三人は豊彦とは何の関係もない人であったが、豊彦に対して思いやりを持って接した。賀川家の破産により生活が困窮し学費を払えなくなり、生きがいを失った豊彦は、自殺さえ考えたこともあったが、彼らはそんな豊彦の生活を助けただけでなく、彼に生命の中の光として生きている意味を与えもした。「さあ、泣くのはやめて、涙を乾かしてごらん。泣いている目には、太陽も泣いていて見え、ほほえむ目には太陽も笑って見える」<sup>17</sup>という言葉にもそれが現れている。豊彦は、博士たちと一緒に過ごした時間をすべて神の指図だと捉えている。

豊彦は『イエスの宗教とその真理』（1964年）という本で「私は何故私の周囲が頹廃して居るかすぐわかった。それは「神」が無かったからであった。（中略）そして私はその闇を破る勇気がなかった。然し私に米国宣教師の導きと愛が加わるとともに私の胸は躍った。今でもローガン先生とマヤス先生は私の親のように私はまた彼等の心のようにいつ如時なる時でも愛しいつくしんでくれるが私は彼等を通じてイエスを見た。そしてイエスの道がよくわかって来た」<sup>18</sup>と言っている。このように、キリスト教が豊彦の暗い生活に

---

<sup>16</sup> W.Axling、『賀川豊彦伝』（続）-「明灯」、1933年、第195期参照。

<sup>17</sup> 三久忠志、前掲書、P32頁参照。

<sup>18</sup> 賀川豊彦、『賀川豊彦全集1』「イエスの宗教とその真理」、キリスト新聞社、1964年、135-

光をもたらしたと見られている。彼は、祖母にキリスト教への入信を反対され、徳島中学校卒業後1905年にキリスト教嫌いの叔父に家から追い出されたが、入信の意思は変わらず、15歳の時にマヤス博士の洗礼を受けてキリスト者になった。キリスト者になってから彼の生活と性格は大きく変わり、よく泣いている彼も明るい性格になっていった。

豊彦は、明治学院高等部神学予科に入学後、永井の叔父（生没年不詳）の助けを求めて上京したが、援助を断られてしまう。そんな豊彦にマヤス博士は授業料を約束して彼のために支払ってやる。豊彦は、入学して寮に住んでいた一年間は寂しかったものの、我慢できなくなった時は、図書館へ行って本を懸命に読んで過ごした。

「姉様私は実際紙一枚を買う金が無いのです。然し有りたけの金は皆本に入れるのです。私は姉様の親切は有難くって泣きますが、もし姉様羽織を作る金が有るならば何卒金を送ってください。」<sup>19</sup>彼に服を与えたのは姉だけではなく、ある先生の奥さんも彼をかわいそうと思い、立派な服を与えたことがある。しかし豊彦は受け取った良い服などを全部他の貧しい人に譲ることにしていた。彼は七年の間に、服を一枚しか着なかったと言う。彼は飼い主のいない動物も引き取り、さらにホームレス一人を引き取って宿舎で彼と一緒に住ませた。このような行為が、他の寮生から非難されたのは言うまでもないが、そんな時でも彼は、自分の心、自分の信念を変わず守っている。豊彦はキリスト教の信念の中で、自分は神の一部に属し、自分を犠牲にして弱小な人を助け、神の愛と平和を弱小な人々に届ける義務があると信じていた。これは彼がスラム街へ行く動機になっている。

## 5. 平和思想の萌芽期と軍事拒否事件

豊彦が通っていた徳島中学の先輩である松家昇一によると、日清戦争が終わって学校で満点制の「兵式体操」が行われた。豊彦は中学一年の時、軍事

---

136頁参照。

<sup>19</sup> 明治学院百年史委員会編、『明治学院百年史資料集』第2集「矛盾録」、明治学院百年史委員会、1975年、167-168頁参照。

訓練にそれほど抵抗を示しておらず、成績は良かった<sup>20</sup>。しかし、その後学生は積極的に取り組んで、高成績を取ろうと試みたが、平和主義者であった豊彦はそうではなかったようである。なぜなら、豊彦はキリスト教に入信だけでなく、トルストイの本を読んだ後、彼の平和思想に共鳴し、彼がより堅固な平和主義者となったためである。「トルストイからも大きな感化を受け、人道主義と無抵抗主義は豊彦の心に深く刻みつけられた。そのせいか、徒らに戦勝に酔わず、むしろ非戦論の立場をとった。そのことは、卒業を前にした野外訓練の時、はっきりあらわれた。甲斐甲斐しく武装して歓声をあげている級友たちを尻目に、豊彦はいきなり銃を地下へ抛り出してく演習に行くのは、いやだ！>と叫んだ。」<sup>21</sup>このように、豊彦は軍事訓練の際に、断固として軍事訓練に参加しないと表明した。そのため、担当先生に殴られて鼻血を出したこともある。

平和思想を尊重したマヤス博士、ローガン博士の影響から、豊彦も平和を訴えたのだろう。特に、豊彦はローガン博士の影響を受けて、心の中に宗教の種をまかれたともいえる。と言うのも、ローガン博士による「創世記」の解釈を聞いたことは、豊彦が教会に入ったきっかけであり、また、ローガン博士の人格から新鮮なインパクトを受けたのである。ローガン博士は豊彦を精神的に啓蒙し、燃えさせたといえるかもしれない。豊彦は「神の人を見た者は幸いである。私はローガン先生に於て極めて美しい、そして静かな神の使いを見た。私に、もしもどんな生活が幸福かと問う人があるなら、ローガン先生のような生活が一番幸福だと答えるであろう。ローガン先生は、全霊、全生、全身を日本のために捧げてくれた人である。私はローガン先生のようにになりたい」とローガン博士を褒めている。幼い頃から幸せを望んでいた豊彦には、ローガン博士が幸せな人だと思われ、ローガン博士と同じように幸せになりたくなったのであろう。

ローガン博士が豊彦の心に種をまいた人とすれば、マヤス博士はその種に水をやる人であったと言えるだろう。豊彦はマヤス博士を「私の信仰の父」

---

<sup>20</sup> 横山春一、『賀川豊彦傳』、キリスト新聞社、1951年、22頁参照。

<sup>21</sup> 同上、22頁参照。

と呼んでいる。<sup>22</sup> 豊彦にとってマヤス博士は、家に豊彦専用の席を指定してくれただけではなく、いつまでも暖かく、明るく、信仰厚く、頭がよく、周囲の人々を楽しませる、そんな人物であった。豊彦が道端で伝道したのも、マヤス博士を真似したからである。また、マヤス博士は、自分の書斎の本の多くを読書意欲の強い豊彦に提供し、自由に読ませた。

このような生活の中で、豊彦を変えたのは教会、トルストイ、綱島梁川<sup>23</sup>であった。彼の自伝にはこのようなことが書かれている。「朝は、早くから起き、みんなが床を離れる前に、トルストイや、綱島梁川の著作に読みふけたのでした。ことに英文の新約聖書は「山上の垂訓」を暗記するほどよく読みました。祈りをして八ヶ月目に、マヤス博士から洗礼を受けました」<sup>24</sup>、「洗礼を受けてから、私は励んで、勉強するようになった。そのころわたしに感化を与えた書物の一つにトルストイの『我懺悔』があった。トルストイはわたしの一生の生活内容を支配するようになった。日露戦争が始まった。しかし、私はトルストイの非戦論を信じて、日本の戦利にも興奮を感じなかった」<sup>25</sup> これらを見ると、新約聖書の「山上の垂訓」が、豊彦のキリスト教入信に大きな影響を与えた事がわかる。実際、入信後、彼はトルストイの『我懺悔』を読んでから、反戦論をより一層信じるようになっていく。当時、綱島梁川（1873年－1907年）という日本の英文学界の基礎を作り上げた学者がおり、独特な宗教体験の文章「余が見神の実験」を発表し、当時の青年に大きな影響を与えたが、豊彦はその中の一人であった。豊彦の信仰の一側面である敬虔な体験主義的信仰は、綱島梁川より受けた影響の結果と言えるかもしれない<sup>26</sup>。

豊彦は、日本全国が戦争のために軍事教育に酔っていた時、戦争教育を拒否し戦争と軍事訓練に反対していたが、その動機はトルストイ、教会、2人の博士に影響を受けただけでなく、戦争が社会の安定を破壊し、貧民に影響と苦難を与えることを知ったためである。

<sup>22</sup> 『死線を越えて』（1920年）の中でのウィリアム博士はマヤスのことを語られている。

<sup>23</sup> 日本の宗教思想家、評論家。代表作：『予が見神の実験』。

<sup>24</sup> 賀川豊彦、『若き日の思い出』、旺文社、1955年、82頁参照。

<sup>25</sup> 雨宮、前掲書、160頁参照。

<sup>26</sup> 同上、116頁参照。

## 6. 重病を通して信仰の成長

1907年、豊彦は、明治学院神学予科を卒業し神戸神学校に入学する前に、応援伝道のため米国南長老会の宣教師により設立された愛知豊橋教会へ行った。豊彦は、その教会の長尾牧師のことをこのように記している。「彼は貧乏のどん底にいながら、愚痴、不平を一度だって彼の口から聴いたことはなかった。また彼が怒ったのを見たことがなかった。彼の行いは満点であった……長尾牧師に接して、新約が日本人のものとなったと思った。こんなのを『聖人』と言うのだと思った。『隠れた聖徒』これが長尾巻に奉るべき、もっとも適当な称号であると思う。彼の生活それ自身が神の生活、それが真の宗教生活である。」<sup>27</sup>しかし、幼少から体が弱い豊彦は、伝道を始めて41日目、疲労と肺結核で倒れてしまう。伝染力のある病気であったにもかかわらず、長尾牧師の一家は、彼を引き取り、死線をさまよう豊彦の世話をした。また、このことを聞いたマヤス博士は、伝染病を恐れずに彼のもとへ来て彼と一緒に寝たり看病したりした。このようなキリスト教の隣人愛は、豊彦を徹底的に感動させた。彼は、その後も何度か手術を受け、漁村での修養中病に苦しみ、キリスト教の信仰を揺がし自殺を考えたこともあった。彼は、その後、そういった経験に基づいて、自伝小説『死線を越えて』（1920年）を著した。

修養中豊彦は、ジョン・ウエスレー<sup>28</sup>の日記を読むことがあり、ジョン・ウエスレーも病に苦しめられ、血を吐きながらも貧民窟<sup>29</sup>に行き宣教を行うことに命をかけていたことを知った。このようなジョン・ウエスレーの影響から、豊彦は病気になってもスラム街に行き、本当の「隣人愛」を実現しようと考えていた。豊彦が『ウエスレー信仰日誌』の影響を受け新川貧民窟に行こうと決心したことは、彼が「私が最も深い感銘を受けた書物の一つは、

<sup>27</sup> 賀川豊彦記念松沢資料館編、『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』、株式会社新教出版社、2011年、6頁参照。

<sup>28</sup> 18世紀のイングランド国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物。（オックスフォード大学に在学する時、同じ信念を持つ仲間を集めてから「聖社」を作り、「聖書」・社会・論理に関する問題を研究していた。また、伝統的な伝道活動は新しい社会問題に対応できず、活動を直接に街頭、工場や鉱山などの地域に進出すべきだと考えられている。

<sup>29</sup> 賀川は「貧民窟」を使っていますが、本において他の学者は「スラム街」を使う。私は賀川豊彦の言葉である「貧民窟」をそのまま使う。

ウエスレーの信仰日誌である。私は二十歳過ぎて間もなく、ウエスレーの信仰日誌を手にした。そして幾日かかって省略された彼の信仰日誌を読み終えた。そして私は、新しい自分を発見したような気がした」と記していることから分かるだろう<sup>30</sup>。

## 第二章 貧民窟での救貧活動

### 1. 神戸の貧民窟

神戸スラム街の形成過程については、安保則夫の研究書『ミナト、神戸、コレラ・ペスト・スラム』において次のように紹介されている。「兵庫の一角にあった旧市街をのぞいて、ほとんど寒村に近い状態から明治以降急速に都市化した神戸の場合、スラム形成の過程は、江戸時代からの流民が沈殿して早くから下層社会を形成していた東京や大阪の場合とは、おのずから異なったものであった」<sup>31</sup>。

神戸には全部で7つのスラムがある。そのうち規模が小さいのは琴緒町、川崎、尻池であり、規模が大きいのは、葺合新川、絲木、荒田、宇治川の4つであった。その中でも、新川は2千人余りの特種民が基となって出来た貧民窟のため、日本でも大きな貧民窟である。また、新川スラム街（新生田川）は、神戸市の東端にあり、人口密度が高く<sup>32</sup>昔は屠殺場であった。

日清戦争と日露戦争によって、神戸は造船街になり、繁栄した。明治時代、多くの農村の貧民たちが神戸へ仕事を探すために来たが、戦争が終わると、彼らは失業し収入がなくなったため、一部の人は故郷へ帰った。然し、多くの人は行くところがなく、神戸の街をうろうろしていった。お金も、食べ物も、住むところもない彼らは、どこに行くべきかわからなかった。1909年に豊彦が神戸の貧民窟に入った時、貧民は6000人であったが、1923年の関東大震災後は、1万人を超えた。

---

<sup>30</sup> 雨宮栄一、『貧しい人々と賀川豊彦』、新教出版社、2005年、20頁参照。

<sup>31</sup> 安保則夫、『ミナト、神戸、コレラ・ペスト・スラム』、学芸出版社、1989年、248頁参照。

<sup>32</sup> 賀川豊彦、『貧民心理之研究』、警醒社書店、1915年、92-94頁参照。

## 2. 貧民窟の環境

神戸のスラム街の環境は非常に劣悪であった。貧民が清潔を維持しないのにはいろいろな原因がある。例えば、掃除には時間とお金がかかるためである。平日の仕事時間が長くなると、掃除の気力もなくなり、非常に貧乏な人や怠け者にとっては、家を掃除するのが贅沢なこととなる。彼らがよく口にした話は、部屋をきれいに掃除するのも損であると言うことであった。そして自分の環境が汚いということに彼ら自身が気づいていない。便器とごみ箱の近くに住んでいる人は、自分の住んでいる環境自体が汚いと思わない。だから家を掃除しない。このような混乱して汚いスラム街の環境下で、豊彦は住みこんで宣教をしたのである<sup>33</sup>。

貧民窟に住む人には未亡人、人力車夫、パン屋、紙屑拾いといった貧乏と悲惨を極めた人だけではなく、盗人、喧嘩好き、殺人犯などのあらゆる犯罪者もいた。スラム街の住宅は小さくて台所もなく、汚い環境にあった。便所は長屋の端にある共同便所であり、雨が2、3日間降り続くと、トイレの中のものも溢れて悪臭に耐えられなかった。

1909年（明治42年）12月24日クリスマスの日、豊彦は、車に布団、書籍、数の少ない生活用品をもって神戸新川のスラム街へ行った。豊彦が住んだ部屋は、表が3畳、奥が2畳で床に畳がなく、汚い床板が露出しており、窓や障子もない部屋であった。

## 3. 貧民窟の子供

豊彦にとって、救済の対象はスラム街の大人だけではなく、貧乏生活をしている子供たちでもあった（彼は貧民窟に入る前に、子供たちにおもちゃを持っていったそうである）。このような貧民窟で生活している子供達は、幼くても母と一緒にマッチ工場で仕事をしていた。

子供の学校問題も重要であった。昼間に学校に行く子供は百人に3人しかいなかった。昼間に仕事に行くので、学校へ行く子供が少なかったのである。そのため、夜学校ができたが、子供は眠くなりやすいので、欠席率も高かつ

---

<sup>33</sup> 同上、225頁参照。

た<sup>34</sup>。さらに、盗癖のある子供もおり、豊彦は、そう言った子供の母親にそのことを話したが、子供の母親は何もせず躰の教育を放棄した。こういった環境で子供はおのずから悪い習慣を身につけていったのであるが、貧民窟の子供のこのような教育問題は避けられないものであった。

貧民窟では、お金を稼いで生活を続けるための手段が様々あった。一部の人は日払いのバイトをしたが、一部の人は他人の子供を養子にして養育金をだまし取った。そして、得た養育金はほとんど自分のために使いきり、子供の食事費には使わなかった。赤ん坊でもおかゆとお湯だけ飲ませた。横山春一によれば、「金に困るものだから、死ぬとわかりながらも、僅か五圓の金に目がくれて貰ったと言ふ。母乳もなく、牛乳も買へぬものだから、お粥とおも湯ばかりと興へてゐる間に、死んでしまったのだ。「おいたべらう」とあだ名された男に話をして葬式をすることにした。」<sup>35</sup>とある。動物のように扱われたが、それは、親が自分の子供は、自分が所有権を持っていると思っていたからである。

子供を世話するお金がない親に頼まれて私生児を安全に殺害する「入口屋」という子供引き取り所が自然に形成されたりもした。と言うのも、貧民窟のほとんどの子どもたちは、自分の生年月日を覚えていなかったし、神戸のスラム街では赤ん坊が亡くなったり、殺されたりすることも多く、そのため、貧民窟では葬式がよく行われたからである。

日露戦争後、日本の経済は大きなダメージを受け、子供の殺害がさらに多くなった。赤ん坊が死ぬと、死体を検査するために医者は来るが、部屋が汚いため、庭に立ったままで脈さえ取らずに「栄養不良」とだけ言って帰ってしまうのであった。このようなことを受け入れられない豊彦は、子供が死ぬたびに、自分の布団や衣服をお金と引き換えて、葬式を行った。彼は、冬でも、服を2枚しか着ておらず、魚も肉も食べなかった。貧民を訪問する時、食事は一日一回だけとし、自分の持っている服を貧民に与えた。また、彼は、老婆から死にそうな赤ん坊を引き取り養子にしたこともあった。豊彦はおむ

---

<sup>34</sup> 武内勝、『賀川先生の献身についての証し』、賀川豊彦の良友・武内勝氏の所蔵資料より(4) - 賀川豊彦の魅力 (鳥飼慶陽)、1956年。

<sup>35</sup> 横山、前掲書、61 - 62頁参照。

つを替えたり、授乳したりしながら、社会の墮落と非情を嘆いたのであった。

豊彦は、貧民窟の生活環境が劣悪であったのもかわらず、そこから逃げるつもりはなかった。豊彦自身、家族からお金ももらえず、愛も感じられなかった子供時代に、ローガン博士とマヤス博士から神の愛をもらった経験をしていた。そのため、彼は貧民窟に入る時、全力で底辺の人々に無限の神の愛と平和を届けたいと思ったのである。

貧民窟で幼児の死亡率が高い理由の一つは、授乳の問題である。母親は貧しくて自分自身もバランスの良い食事が摂れないため、子供を育てるための母乳が足りなかったのである。もう一つの理由は、粗雑に子供が育てられることである。多くの場合は貧民窟で幼児を世話するのは両親ではなく、その幼児の兄弟姉妹である。したがって、幼児が粗雑に扱われることが多かったのである。大正3年4月中旬に三重県の田舎で8歳の男の子が石で幼児を殺すという事件が起きたのも、そのような事情があるのだろう。豊彦は、その原因が保育園の不足にあり、深刻な社会問題であると考えたようである。

そのような深刻な社会問題を解決するため、豊彦は甲子園二葉幼稚園、松沢幼稚園や保育園などを開業した。また、子どもの視野を広げるために幼稚園の中に雑草園を設置した。豊彦の幼稚園や保育園に入園している子供は両親が育児放棄をし、犯罪に手を染めた子供であったため、両親から売られたのである。豊彦は子供たちを助けるために、政府に彼らに牛乳などを提供して生活を改善するよう呼びかけ、自分自身は童話を書いて子供の精神生活を改善した。

#### 4. 病人

豊彦は『貧民心理之研究』（1915年）において、健康は社会の経済的な面を決めていると主張している。

日本の女工は総数五十萬あって、その中の三十萬人が二十歳以下の女子で、又その中四十萬人が染織工業即ち生絲、織物、紡績に従事しているのである。中略。毎年田舎を捨て工場に出る女工は平均二十萬人であって、その中再び故郷に帰るものは八萬人、その八萬人の中の一萬

二三千人は病人、またその病人の四分の一が結核と云ふのである。なんでも紡績会社などでは女工の罹病季と云ふのがあるさうで、初め三ヶ月の中に倒れるか、或は八ヶ月目に倒れるか、この再度の試練は頗る女工に向つては難関であるさうな。中略。処がその中で結核で斃れたものが最も多く、その次は胃腸である。中略。然し之は受療七日以下位のものであるから監獄統計の様に丁寧に登記するものなら、実に驚ろく可き悲惨なものとなるであらう。<sup>36</sup>

上記の豊彦の主張から見ると、貧民は生活に追われて工場に入って仕事をし、その結果、非常に多くの人が職病業になったにもかかわらず、命が保障されていなかった事がわかるだろう。貧民窟の衛生環境は劣悪であり、また、貧民窟に住んでいる人々には経済的、時間的余裕がなく、病気にかかっても治療できずに悪化することが多かった。結核のような重病に罹ると、生活がさらに困難になり、死を待つしかできなかつたといつても良い<sup>37</sup>。

ロバート・シルジェンは、『賀川豊彦・愛と社会正義を迫る求めた生涯』(2007年)の中で「犯罪と病気とはこの環境の中ではびこり、肺結核、肺炎そして栄養失調と公衆衛生の欠如によって起きるおびただしい慢性の病気と共にコレラ、腸チフス、ジフテリア、天然痘といった伝染病が周期的に襲った。」<sup>38</sup>と述べている。



図1 賀川豊彦、『貧民心理之研究』、1915年

<sup>36</sup> 賀川豊彦、『貧民心理之研究』、184-185頁参照。

<sup>37</sup> 同上、192頁参照。

<sup>38</sup> ロバート・シルジェン、『賀川豊彦愛と社会正義を迫る求めた生涯』前掲書、70頁参照。

豊彦は友人の助けを得て、薬局と歯科を開設し、積極的に貧民を助けた<sup>39</sup>。また、新川で無料診療を行うだけでなく、病人、身体障害者や老人を自分の部屋に泊めて、大小便までの世話をしていた。彼は稼いだお金や他人からの寄付金をすべて救済金として貧民のために使った。貧民に食事を提供する以外に、旅費がない旅人にチケットを買ってやるなど様々な支援を行った。豊彦の注意は全て貧民に集中していた。彼の衣類は一年を通じて2枚しかなく、肉も食べずに野菜やうどんばかりを食べていたようである。体重は軽く、貧しい生活を送っていたにもかかわらず、全力で他人のために貢献していた。

## 5. 救貧事業と伝道

豊彦は貧民のために毎朝5時に礼拝を開いた。この時間帯を選んだのは仕事がある人のことを考えてである。早朝にもかかわらず、礼拝の参加者はほとんど遅刻することはなかった。一方、豊彦は午後、街の中に出て伝道したり、夜の伝道礼拝を案内したりしたが、誰も彼の話聞いてくれなかった。それでも彼は貧民たちの部屋を訪ね、悩みを聞いた。このような活動と同時に、彼は米国の信徒からの寄付金、アルバイトで稼いだお金、自分の持ち物を貧民たちに提供したが、いくら努力しても新川の貧民問題を解決できないことを痛感するのであった。

豊彦は新川に入って3年目に天国屋というレストランを開設し、安くて美味しい料理を貧民たちに提供し始めた。しかし、貧しい人々が天国屋で食べ逃げしたりして、貸し倒れることが頻繁にあったため、天国屋は赤字になり、閉店となった。この事を経験してから、豊彦は救霊と救貧は不可分であると認識した。

---

<sup>39</sup> 三久、前掲書、72-73頁参照。

### 第三章 社会平和のための労働運動発起

#### 1. 労働運動発起のきっかけ

豊彦は初めて貧民窟に入った時、自分のことを「救霊団」と呼んでいた。すなわち、「魂を救う団体」である。

豊彦は、マヤス博士の紹介を通じて同教会の実業家ジブリーから寄附金をもらった。また、日本の篤志家も彼の「救霊団」に経済的な支援を提供したのであるが、1919年3月、ジブリーが退職したため寄付金が止まり、豊彦の貧民窟支援活動が困難になってしまう。

豊彦は、貧民窟で貧しい人々と共に生活した経験から、貧民たちにあった困難な境遇を感じ、米国の信徒から2万円の寄付金を求め、新川で無料診療の病院を建てようとした。しかし、周囲の人は豊彦に、寄付金がもらえなければ、渡米し博士学位を取得して帰国し、学校の非常勤講師を務め、その給料で病院を建てることを勧めた。豊彦は、これをきっかけに、米国へ留学することとなる。また、寄付してくれた実業家と対面し感謝する目的もあった。

とは言え、豊彦は自分のお金をすべて貧民活動に使い、旅費が全然なかった。そこで、マヤス博士、ローガン博士、さらに賀川家倒産後豊彦を世話した義母などが、豊彦に留学のための旅費の支援をした。豊彦は、米国留学中の貧民窟の支援活動を武内勝に委託した<sup>40</sup>。

豊彦は留学中、6万人の米国の労働者が自分の利益のためデモを起こしたことに感動し、彼は日本に帰ったら労働組合を作りたいと思った。1916年10月、豊彦は帰国の旅費を稼ぐために、ユタ州オグデンの日本人書記として働くことになった。オグデンはモルモン教徒の開拓した小さな町である。横山春一（1911年－不明）の『賀川豊彦伝』（1952年）によると、「年が改って大正六年の春、甜菜栽培の小作人であるモルモン教徒と日本人とが、小作人組合を作って、甜菜の値上げを要求した。元来、日本人とモルモン教徒はおそろしく仲が悪かった。そこを資本家が付けこんで、いつも彼等の生活をおびやかした。賀川は両者の融和を説いて、団結して資本家にあたることを教へ

---

<sup>40</sup> 三久、前掲書、62-63頁参照。

た。資本家がそれを拒絶したことから、ストライキとなって、数百名の小作人が結束して立上った。この背後にあって、終始リーダーシップをとったのは、オグデン日本人会書記の賀川であった。中略。毎月五十ドルの俸給の中から、帰国旅費を貯へてた賀川は、百ドルの謝礼を貰って、忽ち、帰国の準備がととのった。」とある。この成功例から、彼は日本で労働組合を組織しようとしたのかもしれない<sup>41</sup>。

1917年5月4日彼は留学生生活を終えて新川に戻り、妻春と共に、自分の弟子武内勝と一緒に創ったイエス無料診療の奉仕に加わった。

春と共に貧民窟で生活をし始め、春を中心として、無料の出張診療を発足し、長屋の病人を軒並みに訪ねていった。特に貧民窟の中にはトラホームにかかった人が多く、豊彦は毎日点眼してやった。豊彦と春もトラホームになり、視力が半分ほど悪くなり、その後、二人はトラホームに一生苦しめられたのであるが、それでも貧民を助けるのを諦めなかった<sup>42</sup>。

この頃の工場労働者について述べておく。豊彦が帰国する前の1917年4月6日、米国もドイツとの戦争に参加すると発表した。米国は第一次世界大戦に参加した後、日本へ鉄の輸出を禁止した。それにより、日本の労働者は大きな影響を受け、生活に急激な変化が生じた。また、物価の暴騰は多くの労働争議を引き起こし、その影響は日本社会全体に波及した。1918年に富山県で起きた「米騒動」は全国に広がり、神戸でも様々な襲撃事件があった。社会的地位が低く、長期的に虐げられた労働者たちの不満が、一瞬で爆発したのである。豊彦は、貧民への資金援助と米国で経験した労働運動の成功例を分析し、経済的支援だけでは貧困が解消されないと意識し、それを解決するには、労働者自身の努力と工場主の意識改善が不可欠だと考えていた。そして、彼は精一杯労働組合を結成し、工場主との交渉を行った。

豊彦は労働運動を積極的に指導すると同時に、スラム街住民の特徴について研究し、以下のようにまとめた。

#### 1) 酒に溺れ生活が乱れている。

---

<sup>41</sup> 横山、前掲書、115頁参照。

<sup>42</sup> 横山、前掲書、121頁参照。

- 2) 衛生状態の悪い場所で働くことで健康を害するため、病気にかかって収入がない。
- 3) 機械を扱う仕事はケガをしやすいが、会社では労災補償が完備されておらず、ケガをしても治療代が払えないため、スラム街に入っている。
- 4) 日払いバイトで生活している人は不景気になると仕事がなくなり、経済的に余裕がないためスラム街へ入ってくる。
- 5) 社会保障制度が充実していないため、貧困層が増えている。
- 6) 貧民は自分の境遇を甘んじて受け入れる<sup>43</sup>。

スラム住民の共通点は、経済的に貧しいことや、社会保障制度の不備で、労働災害が発生しても保障されないことと考えられている。しかし、彼らは仕事の理想を語らない。なぜなら、衣食住さえ解決できないので、理想も語るができないからである。社会が安定するためには、少なくとも貧民の日常生活を支援し、資本家が労働者の権利を保障しなければならない。このように考えた豊彦は、資本家による搾取に対して、自分が何をしなければならぬかを痛感したのである。

豊彦は、彼の著書『太陽を射るもの』（1964年）で、「とても救済など言っても駄目なのだ。労働組合だ！労働組合だ！それは労働者自らの力で自ら救うより外に道はないのだ！俺は日本に帰って＜労働組合から始める！＞」と主張している。

豊彦は、米国で経験を積んだら、日本で労働組合を創立するつもりであった。貧民に自らの力で自分の利益を図ってもらいたかったのである<sup>44</sup>。

豊彦にとって、社会が揺れ動くと、まず苦しむのは貧民たちだという認識があったが、20世紀初期に、日本で最初に貧民を助けたのは「友愛会」という組合であった。

「友愛会」は1912年8月1日に鈴木文治ら15名が集まって組織された。この会は、鈴木文治がクリスチャンであったことから、キリスト教の精神に立脚していた。また、1917年5月に成立した「友愛会神戸連合会」は、豊彦が

---

<sup>43</sup> 賀川豊彦記念館出版会会員、前掲書、95-96頁参照。

<sup>44</sup> 雨宮、『貧しい人々と賀川豊彦』、127頁参照。

参加した最初の労働組合であり、そこから本格的に労働運動を始めた。1917年9月9日、キリスト教青年館で友愛会神戸連合会の特別講演会が開かれ、豊彦は帰国後、労働問題に関心を持っていたため、講師として特別講演会に誘われた。それをきっかけに、豊彦は友愛会と深い関係を結んだのである。その後、豊彦は評議員にも推薦された。彼は組合費を引き上げ、『新神戸』といった月刊会報の開設を提案し、編集顧問として労働者のために声を上げた。それを通じて、労働者の力で資産家の横暴を抑制し、侵略のない平和な世界を創造することを決意した。1918年に、彼は友愛会の葺合支部長に推され、正式に友愛会のメンバーになった<sup>45</sup>。

豊彦は会報の『新神戸』で「生存権と労働権」と「社会改造と労働階級」という文章を発表した。この二つの文章によると、人の価値を表すためには、労働の権力が重要であるとされている。通常的生活を維持するには収入が必要であり、失業してはいけない。したがって、労働者は団結して自己が属する階級意識を覚醒させ、資本主義体制の現状を変え、社会の改革に力を入れるべきであると主張した。

彼は労働者の利益獲得を助けるため、1919年1月16日に、「治安警察法第一七条撤廃宣言」というテーマで講演会を開催した。なぜなら、治安警察法第17条では、労働者の団結権とストライキの権力が否定され、労働組合やストライキを組織することに対して罰を科すとされていたからである。豊彦は講演会で「世界は明け行く、労働者は人間としての実在を自覚す、労働者は今日に至るまで、権力と金力と機械に圧迫せられ、過去幾十正規を奴隷として送れり、然して今や世界は明け行く、我等は解放せられたる真人としてここに立つ！」と宣言した。

労働者が、企業や資本家に抑えつけられ、抵抗の余地もなかったため、豊彦はこのように労働者の自我の目覚めと圧迫からの解放を訴えた。また、彼は「我等は自由権を要求す、我等は団結の自由と集合契約の権利を主張す、何故なれば資本家のみひとり賃金制定の権利を有するか！」と主張した<sup>46</sup>。

豊彦が訴えたのは、毎日機械のように働き、生活も保障されていない労働

---

<sup>45</sup> 賀川豊彦記念館出版会会員、前掲書、100頁参照。

<sup>46</sup> 三久、前掲書、95-96頁参照。

者たちが団結して人権を求め、他人に圧迫されないということであった。失業しても生活を保障されれば、何も選択できずに自暴自棄や死を待つではなく、生きていくことができる。ただし、「治安警察法第七条」があるので、労働者は自分の権利を主張することができない。この法律を廃止するために、豊彦は友愛会神戸連合会の2千人と友愛会本部の5千人の署名を集めて衆議院に陳情した。

労働者の権利が保障されておらず、労働者自身も権利を守るという意識がないことを悟った時、豊彦はスラム街の宣教と救済活動を弟子の武内勝に任せ、彼自身は全身全霊で労働運動に身を投じ、根本から社会制度を変えて、貧民の形成を防止しようとした。

豊彦は会報で毎月一回、労働者のために声をあげた。1912年2月、豊彦は、現在の生活は人が作った物を消費する生活であるにもかかわらず、金持ちだけ選挙権があるという現実を批判した。豊彦は会報で「労働者普通選挙運動宣言」を発表した。1919年3月に会報は、名前が『新神戸』から『労働者新聞』に改名され、関西地区において大きな影響力を持つようになった<sup>47</sup>。

選挙運動は関西で盛り上がり、1919年4月、神戸、大阪、京都の連合会が統合し、「友愛会関西労働同盟会」設立された。豊彦は理事長と指導者として推挙された。彼は、同年8月の七周年大会で「友愛会」の名前を「大日本労働総同盟友愛会」に変更し、大会で「本来的な人間の自由、労働者の人格の尊厳、教養を身につける機会の保障、生活の安定と自己の境遇に対する支配権が与えられること、国際連盟の労働規約に基づいて労働組合運動の自由を保障すること」を宣言した。これは豊彦の労働者観であり、労働組合観である<sup>48</sup>。

さらに、会報である『新神戸』にはこのような記事があった。「今日の労働者は生存すら脅かされている。富の分配の不平等は、日本ほどひどいところはない。労働者の乳児は中産階級に比べて五・六倍も多く死ぬ。今日の資本家と機械文明は、われらに貧民街と伝染病を与えた。資本家の馬は馬丁と獣医が付き大切にされているが、貧民窟の子供には馬丁も獣医もなく、馬並

<sup>47</sup> 武藤富男、『評伝賀川豊彦』、キリスト新聞、1981年、209-212頁参照。

<sup>48</sup> 賀川豊彦記念館出版会会員、前掲書、97-108頁参照。

みの待遇も与えられない。新しい文明は、働くものに労働権と生存権を保証するところから始めなければならない。」<sup>49</sup>。

社会全体において貧富の差が広がり、労働者は基本的生活にも問題があるのが明らかになった。豊彦は彼らを助けるために、貧困支援を目標とした友愛会に参加し、貧民を連れて最大の労働運動を行った。豊彦は貧民のために、1300人の労働者に支持してもらい、消費組合共益社を組織した。その後、山崎造船所が夏季賞与の上前をはねたため、豊彦は参謀として、1921年6月25日-8月9日指揮者である久留弘三、野倉万治、伊藤友次郎と一緒に3万人の労働者が参加するストライキを組織した。二回目のストライキでは労働者が警備中の警察と流血事件を起こしたため、175人の幹部が拘束された。幹部の拘束により大きなダメージを受けたが、ストライキを通じて労働者が団結すれば大きな力になることを示した<sup>50</sup>。

『賀川豊彦全集9』において、豊彦は1916年の鉄道院を例にあげ、そこで、労働者は労働災害で死亡した場合、救済金は265円53銭しかなかったと述べている。この程度の救済金では、労働者が倒れた家庭の生活を維持することができない。そこで、豊彦は、日本政府が「国際労働法同盟」に加入し、労働者の安定した生活を確保するための保障制度を完備するよう求めた。豊彦は米国の賠償の基準のようなものを望んでいたのである<sup>51</sup>。

豊彦は労働災害にあった人を助けるため、また、人々の病気を治すために、皆で助け合う保険を作らないといけないと共済を創った。また、彼は失業保険も作った。このように、豊彦は協同組合を創立したため、世界から協同組合の父と呼ばれた<sup>52</sup>。

スラム街に住んでいる多くの貧しい人は、技術などを持たず、毎日ぼんやりと暮らしており、犯罪率も非常に高まっていた。彼らは平穏な生活を送ることができなく、社会にも危害を及ぼし、社会の平和と安定を破壊することになっていた。そのため、豊彦はためらうことなくスラム街に住み込み、自

---

<sup>49</sup> 賀川豊彦、『新神戸』、友愛会神戸連合会、1918年。

<sup>50</sup> 三久、前掲書、71-76頁参照。

<sup>51</sup> 賀川豊彦、『賀川豊彦全集9』、101頁参照。

<sup>52</sup> 関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、『ミナト神戸の宗教とコミュニティー』、神戸新聞総合出版センター、2013年、286頁参照。

分の力で貧民を助けようとしていた。彼らの生活がよくなるからこそ、社会が安定しもっと平和になるのであると豊彦は考えていた。

## 2. 賀川豊彦と中国の初めての出会い

豊彦は日本の貧民だけでなく、中国の貧民にも関心を持っていた。1920年、吉野作造（1878年－1933年）が上海日本人YMAC幹事の内山完造（1885年－1959年）にYMACの夏期講座の講師を依頼された際、豊彦を自分の代役として推挙した。それで、豊彦は初めて中国へ行くことになった。また、その際に、豊彦は陳独秀（1879年－1942年）<sup>53</sup>と会った。陳は、社会主義者でありながら、マルクス主義の支持者である。しかし、豊彦の自伝小説『壁の声がするとき』で、「過激派の陳独秀と会った。陳は初めから終まで彼に（賀川）に物を云はなかった。……彼（豊彦）は五晩の講演を副業として、毎日上海の貧民窟を調査して廻った。」と記述されているように、豊彦は陳独秀に無視され、何も交流することができなかった<sup>54</sup>。

陳独秀は最初豊彦を冷遇したが、豊彦のスラム街での調査活動を知った後、彼を賞賛した。陳独秀が著した『独秀文存』には、このような一節がある。

賀川豊彦先生は良心的な学者である。彼は神戸の貧民窟に十数年住んで、貧民救済運動に一途に取り組んでこられた。彼は、二カ月前に上海に來られて上海の貧民窟を調査された。賀川先生は、大阪での労働問題講演会で、現在の資本主義の社会では、金銭は生命よりも、はるかに価値有るものとされている。資本家は富を蓄積するためなら労働者の生命を犠牲とすることを惜しまない。<sup>55</sup>

陳独秀の言葉から、陳が豊彦に対する認識を変えた事がうかがえる。すなわち、豊彦を、貧民のために自分を犠牲にして資本家と対抗し、プロレタリ

---

<sup>53</sup> 陳独秀は中国の近現代思想家、政治家、革命家であり、中国共産党の創始者と初期指導者であった。

<sup>54</sup> 浜田直也、『賀川豊彦と孫文』、神戸新聞総合出版センター、2012年、15頁参照。

<sup>55</sup> 同上、18-21頁参照。

ア階級の利益を勝ち取り、労働環境と労働保障制度を改善することに努力を払っていた、良心的で慈悲深い人であると評価したのである。

### 3. 豊彦と中国協同組合の関係

実は、当時上海にも協同組合運動はあった。それに関しては、薛仙舟（1878年－1927年）<sup>56</sup>という人物に言及しなければならない。薛仙舟は1905年にドイツに留学する際、飢餓に苦しむ貧民に対するライファイゼン型の農村信用協同組合論に着目して研究した。彼はそれが中国の貧民解放に役立つと確信していた。彼は、復旦大学で教職についた1914年から、協同組合を宣伝し始めた。1919年に「上海国民合作社儲蓄銀行」を創設し、翌年には協同組合と関係がある新聞『国民週刊』を創刊し、「上海合作連盟」を組織した。そのため、彼は中国の協力運動の創始者であり、「中国協同組合運動の父」と讃えられている。1920年5月、薛仙舟は20名以上の学生を指導し、『平民』（その後、『平民学社』に改名）という週刊誌を設立した。まず最も重要な仕事として都市消費協同組合を組織し、イギリスに倣って中国の都市における労働問題を解決しようとした。

豊彦は上海のスラム街で調査を行う際に、薛仙舟の上海の協同組合運動に触れる機会があった。しかし、豊彦は、ヨーロッパのような都市消費協同組合運動は、中国社会の大多数である農民とは関係がないと悟り、都市消費協同組合運動を現地化しなければならないと考えた。彼は中国の農民に同情したが、中国の協同組合に対しては悲観的であった。その理由の一つは、当時の薛仙舟が国外の事例と経験をそのまま利用し、中国の現状を考慮していなかったからであろう。

尹樹生（1908年－1999年）は『世界合作運動史』（1940年）で、「1919年前後は中国の新文化運動が盛んに発展した時期である。政治的、経済的、社会的思想のみならず、協力思想と協力制度もこの時期に外国から輸入された。しかし、その中心になったのは理論的な部分のみであり、協力組織はまだ普及していなかった。」<sup>57</sup>と述べており、その点を証明している。

---

<sup>56</sup> 革命党人、社会改革家、理論経済学者。

<sup>57</sup> 尹樹生、『世界合作運動史』、中華書局、1940年。

平民学社の人たちは、農村社会を中国の協同組合の中心として展開した。そのために、まず信用協同組合を設立し、農民を高利貸しから保護するよう呼びかけた。しかし、彼らの活動は政府から支持を得られず、さらに共産主義運動と間違えられ、政府に弾圧された<sup>58</sup>。

薛仙舟の協同組合は実際に農民を助けることができず、中国の協同組合には多くの問題が存在しており、理論と実践に大きな差があると考えられているのである。豊彦は、その原因が、中国の協同組合の中枢幹部には愛他主義が欠け、献身的な精神がなかったことにあると批判した。利益があれば彼らは横取りし、協同組合の根本的な精神を忘れていたのである。また、中国の宗族と近代資本主義は非常に発達し、公有地は権力者に独占され、それにより事実上私有財産制度の観念が非常に強かった。資本主義は、資本さえあれば組織を支配することができる唯物主義であり、協同組合は人をもって基本とする精神主義である。協同組合においては、出資額に関係なく、すべての人は投票の権利を持ち、対等と平等な関係にある。豊彦は協同組合運動が隣人愛に基づき、他愛を意識しなければならないと考えていたため、もし他愛がなく、協同組合運動の利益を横取りしたら、貧困対策の実行や福祉施設の設定などは不可能であるが、一方、協同組合の利益を保健、共済、教育、年金、各種社会保険のために利用すれば、社会が一新されると考えていた。

1920年代豊彦が中国で視察する際に、1920年中国の黄河流域で大干ばつが発生し、多くの飢饉民が出た。中国は土地を改良していなかったため、洪水と干ばつが起こる可能性も高かった。それにより、中国は豊かな自然資源にも関わらず、国民の食料を確保することができなく、様々な原因で多くの人が餓死したのである。

一方、日本には洪水と干ばつ災害に備えての有力な共済組合があったため、餓死者はほとんど出なかった。豊彦は、昔から洪水と干ばつの被害を受けている中国に、そのような完備された協同組合があれば、かなりの犠牲者の数は減ると考え、中国には水利組合の協同組合が必要であり、また、それは大きく成長できる事業でもあると確信していた<sup>59</sup>。

---

<sup>58</sup> 浜田、前掲書、35-36頁参照。

<sup>59</sup> 賀川豊彦、『賀川豊彦全集13』、キリスト新聞社、1964年、10頁参照。

中国の視察を終え、豊彦は日本に帰って、『労働者新聞』で『支那から帰ってきて』というテーマの文章を発表した。その中で彼は「支那の飢饉を見ました。とても言語に絶して居ります。」と述べている。中国における協同組合運動の理論は、貧民の現状と差が大きいという結論であった。その後、豊彦と薛仙舟は協同組合運動について、その理論と実践に関して交流し、1927年、豊彦は、上海大学での協同組合運動における理論と実践の結びつきについての講演会に招待された。薛仙舟も上海から日本に来て、日本の産業組合運動を視察した。彼は、協同組合運動の推進を目標としていたため、豊彦を通じて日本の組合運動の動向を把握した。豊彦は薛仙舟の実意に感動した。1927年の豊彦の2回目の中国訪問の際も、彼は中国の貧民と合作社に対して依然として関心と情熱を持っていた。中国キリスト教協進会の誠静怡総幹事は豊彦の講演記録の序文で彼を褒め「最近、賀川氏は我が国の被災民の状況に注意をはらい、被災民への援助を心底願ひ出た。彼の度量と情熱は、この度の災害における救済への信念において窺い知ることができるのである…中略…賀川氏の気魄とその眼光は、多くの英雄のそれと同じである。」と述べた<sup>60</sup>。

## 第四章 戦争と反戦

### 1. 戦争に対する豊彦の態度

1920年代半ばに蒋介石が率いていた国民党は、日本からの中国の解放と中国の国際権利の平等を要求した。これは中国にとって非常に大きな意義を持っていた。しかしその後、日本は、中国の内戦が居留の邦人にとって危険なため、日本による保護が必要であるという口実で、山東省に5000人の兵士を出兵させた。豊彦が初めて満州を訪問した1928年5月3日、日本軍は山東省済南で国民党軍に進攻し、大量の中国軍民を虐殺した。日本軍が中国人1万人以上を殺し、また南京国民政府の交渉代表を殺害したこの惨事は、中国国民と豊彦の怒りを呼び起こした。また、田中内閣がさらなる侵略政策を

---

<sup>60</sup> 浜田、前掲書、34-39頁参照。

実施していることを表明したため、豊彦は怒りに震えた。彼は同年8月に、キリスト者広瀬庫太郎と社会主義者とともに「全国非戦同盟」を結成し、委員長となり、帝国主義教育に反対し、平和団結を提唱すると宣言した。また豊彦は、1930年7月、中国での数回の講演で日本の侵略を謝罪した。

1930年代、世界経済危機が発生し、日本経済は深刻な影響を受けた。また、それに伴い政治的危機も起こり、国内外において様々な課題が生じた。その時、欧米諸国は経済危機に対応し、蒋介石は「剿共（共産党を剿滅）」を行っていたが、日本のファシズム主義はワシントン体制による日本への束縛を突破し、満洲を占領しようとしていた<sup>61</sup>。1931年9月18日夜10時ごろ、日本軍は南満鉄道の線路を爆破した。しかし、中国軍が鉄道を破壊したと故意に事実を偽って告げて、これを理由に独立守備隊第二大隊を中国東北軍駐屯地の北大營に進攻させた。翌日瀋陽をはじめとして、続々と東北の遼寧、吉林、黒竜江を占拠して行った。戦争に反対していた豊彦はこの「918事件」を後に知ったが、遠い米国では何もできなかったため、米国から帰国の船上で「悩みの子」と「何か」という詩を書くことで反戦の声を上げた。米国での豊彦の講演の際、壇下の中国の学生は豊彦の態度に不満を示し、彼に自国の残虐に反対すれば自分を犠牲にして主張すべきだと批判していた。しかし、彼は、自分がやるべきことはまだ他に多く残っており、自己犠牲を払ってお役立にはたたなく、効果がある方法を通じて日中両国の平和を守るべきだと考えていた。

庾凌峰は『戦前・戦中（1920—1945）の中国（台湾、香港を含む）における賀川豊彦の交流活動とその受容に関する研究』において以下のように述べている。

「私はここに来て中国の友達の皆さんと面会するのが恥ずかしくてたまらない。日本は中国に対して侵略国家となっているが、その齎した悪果は決して否認してはいけない。私はこうして思えば、頭を下げて無言で、中国同道に寛容や許しを求める。日本の武力政策には、私は力を尽くし

---

<sup>61</sup> K-H・ジェル、前掲書、168頁参照。

て反対したが、説得できないことに対して恥かしく思う。私には進める道は二つしかない。一つは、対華侵略の罪悪を公開の場所で披露することである。もう一つは間接的に平和運動を提唱することである。私は前者という行動を取ったならば、その結果、牢獄生活を迎え、またはさらに命を犠牲するに至る恐れがある。というのも、本日の日本国内で武力侵略を主張する人々は勢力を独占している。反対論を持つ人は、きっと暗殺を遇されるだろう。一年間以来、このようなことは常に目にするだろう。私は、以前よく政府に警告されたが。もし、後者の行動に従えば、比較的温かな方法を用いて、続いて平和を提唱することができる。私の論文は反対を起こさせやすいため、従って、すでに策略を改め、小説という形で、平和主張を宣揚しようとしている。最近著した数種は（原文は1、2種と書かれている。中国語では、数字は詳しく示されているものではなく、概ねの言い方である）上海戦争問題に関連のあるものである。私を愛する友人は、常に私に次のように言ってくれる：“君に数年長生きし、無用な犠牲をしないよう祈っている。私は非常に同感する。私の進める方向を明確に示させるように、諸君は私のために多く祈祷するようにしてください。諸君は我が国の罪により、私を拒否するのではなく、逆に友情あふれる熱情で私を歓迎する。これはちょうど基督教の精神であり、私が極めて感激しておることである。私は、ただ、基督教が私を指導し、東アジアに本当の平和が訪ねるよう願っている。”<sup>62</sup>。

豊彦は、それまで反戦宣言で何度も逮捕され、また、警告を受けていたため、日本の中国に対する侵略行為を直接的に批判した場合、暗殺などの可能性があるを知っていた。それで、彼は平和アピールの方法として、演説や詩や本を書くという方法を選んだ。豊彦は基督教の理念に基づいて、比較的温かな方法を使って平和を促進しようとしたのである。彼は講演の中で、戦争や帝国主義に反対するだけでなく、基督教の愛を通して人を感化しようとした。社会を改造し、世界に戦争がないようにすることができると思

---

<sup>62</sup> 庾凌峰、『戦前・戦中（1920—1945）の中国（台湾、香港を含む）における賀川豊彦の交流活動とその受容に関する研究』、2020年、75-76頁参照。

じていたからである。これは、子供の頃、いじめられていた彼が、主が彼をいじめた人の罪を許してくれるように祈っていたこと、また、キリスト教の偉大な力が、罪人をすべて改造し、傷つけられた弱者を救うことができると考えていたことに通じている。

別の視点から見ると、豊彦は「軟弱」な人であると言えるだろう。彼の「軟弱」とは自分の責任の重さを知っていたことに起因しているだろう。豊彦が自分の命を背負っているだけでなく、貧民の命も背負っていたからであり、そのため、むざむざと自分を犠牲することを避けたのではないだろうか。その結果、当時の社会情勢や軍国政府と妥協したのである。このような点では、完全な平和主義者とは言い難いであろう。

## 2. ガンジーと豊彦の理念および行動

豊彦と同時代の偉人であるガンジーは、豊彦と同じ問題に直面したが、ガンジーは豊彦と異なる方法による問題解決を選んだ。

ガンジーは、1869年10月2日から1948年1月30日まで、インド民族解放運動の指導者とインド国民大会党の指導者としてインドを率いて独立に踏み出し、イギリスの植民地支配から脱するために活躍し、インドの国父と呼ばれている。また、彼は非暴力的抵抗を提唱する現代政治学説のガンジー主義の創始者であり、この「非暴力的」の哲学思想は世界中の民族主義者と国際平和運動に影響を与えた。

第一次世界大戦後、ガンジーは、インド国民大会党の独立運動に参加し、非暴力的・不服従運動を提唱した。彼は歴史の上で踏みにじられた低カーストのために平等な権利を勝ち取り、特に「安民」と冠された者（彼は「神の子供」と呼ばれていた）のための権利を勝ち取るために努力した。1922年3月18日、彼は英印当局により6年の懲役を言い渡されたが、その後、国大党は彼を訪問し、再度不服従運動をリードするように彼に頼んだ。そこでガンジーは、植民地政府の食塩公売制に抗議する運動を指導したが、1930年に再び逮捕された。1933年、ガンジーはある週刊誌で反暴力・反ファシズム・独立を求める文章を登載し、3回目の非暴力的・不服従運動を行なった。しかし、その週刊誌は英印当局によって差し押さえられた。同年5月8日、ガン

ジーは21日間の断食を始め、イギリス政府のインドに対する圧迫に抵抗した。そこで、三度目の逮捕により投獄された。1942年、彼はイギリスをインドから撤退させる草案を起草したため、投獄され、獄中で断食を通じて撤退草案を主張した。

このように、ガンジーは非暴力的・不服従運動でイギリスに抵抗し、断食などを通じて政治的矛盾を解消してきた。また、自分がいつか不測の目に遭うということを知っていたが、恐れずに信念を貫いた。1948年1月30日に射殺されて倒れた瞬間でも、寛容的に犯人の冥福を祈っていた。

豊彦は日本キリスト教界を代表としてマドラス大会に出席した後、ガンジーを訪問した。彼らは日中戦争について論じている。

賀川：私は日本で異端者ではありますが、私の意見というより、あなたがもし私の立場に立ったならば、どうされますか？

ガンジー：私は必ず公開の場所で自分の主張を公布します。

賀川：いいえ、私が知りたいのは、あなたはどのように対処されますか？

ガンジー：私なら、必ず私の異端邪説を公然と発表します。その後、喜んで銃殺刑を待つでしょう。私は必ず、種々の組合及びあなたの事業すべてを天秤の片方に載せ、もう一方に貴国の榮譽を載せます。もし、あなたが国家の榮譽がちょうど売りに出されていることをしていらっしゃるならば、私はあなたに日本の観点に反対するよう宣言して、あなた自身の死を通じて日本を復活させることを提案致します。しかし、ここまでやるには決心し、内在的な信念を必ず持たなければいけないのです。私があなたの立場に立ったならば、先ほど申し上げたように実践できるか否かわらないですが、あなたに聞かれたので、卑見を教えて差し上げただけです。

賀川：信念は持っていますが、しかし、信念は断つようと友人に勧告されました。<sup>63</sup>

---

<sup>63</sup> 庾凌峰、『戦前・戦中（1920-1945）の中国における賀川豊彦の受容に関する一考察』、2020年、94頁参照。

豊彦が、もし豊彦の立場でガンジーが軍国政府に抵抗するなら、銃殺されるかもしれないが、自分の命を顧みせず、根気強く自分の意見を積極的に主張するだろうということを理解していることがわかる。豊彦は自分もそのような信念があると言っているが、友人に勧められて諦めてしまったことを素直に打ち明けてもいる。ガンジーも友人から勧められて諦めた方がいいと言われたことがあったが、自分の信念を変えず、堅持し続けたと言っている。豊彦は、このようなガンジーの経験を聞いた後、その会話は続けず話題を変えている。

彼が話題を変えたのは、どうやってガンジーに答えるかが分からなかったからなのかもしれない。豊彦の平和反戦演説とガンジーの行動とを比べた場合、豊彦の説はあまりにも無力的であった。豊彦にはガンジーほどの勇気がなかったとも言えるだろう。彼は信念があると言っていたが、友達に言われたら何もしないで諦めたのである。自国のために権利を勝ち取ることに自己犠牲を払ったガンジーとは対照的である。ガンジーと比べると、豊彦がすることは微々たるもので、豊彦は自我保身、強権に妥協する人間だと捉えられるのではないだろうか。

### 3. 衝突の発生と無力感

1934年3月10日、豊彦が中国の学者が主催した女性学識経験者についての女性青年会に招かれ、3月11日、景林堂で講演した時に日本人として侵略のことを謝罪した。しかし、彼が実際に行った行動は貧民を助けた以外に何もなかった。反戦という実行動がなく、主張と精神面に止まっていた。これは彼が最も中国人に疑問視されるポイントであった。侵略された中国人は、自分の領土が無情に奪われ、奴隷として搾取されるなど、精神的にだけでなく物理的にもダメージを受けた。1910年に日本が朝鮮半島を占領した後、1920年に朝鮮農民を中国東北へ移民する計画があった。日本人藤岡啓（生没年不詳）の著書『東省刮目論』によると「唯一の国策は経済戦争で華人と伍する。水田を開拓する上で特殊な技能を持っている朝鮮の人は満蒙に送る。間接的に満蒙に開発を指導して、日本の人口と食糧の問題を解決する。日本人は中

国での発展は、土地の占領を頼るしかない。』<sup>64</sup>この内容から、日本が、東北の朝鮮移民を利用して東北を侵略し、道を切り開こうとしていたことがわかる。期が熟したら朝鮮移民を侵略の道具に使うことができる。また、日本政府は朝鮮移民の中の反日団体と武力を「取り締まり」という口実を使って、軍隊を派遣し、大陸侵略の政策の推進を図っていった。当時の日本政府が東北を侵略するために取った一連の行動と野心が暴露されている。しかし、それだけではなく、1936年に日本関東軍は、新京（現長春）で三回の移民会議を開き、「満洲農業移民百万戸移住計画案」を制定した。その中で、20年以内に日本の農民100万戸500万人を移民させ、1937年から4回に分けて、この計画を完成させることを目標にした。実際には、1941年までの第一期5年間の計画の中で、東北へ渡った日本移民は85086戸で、この時が日本移民の侵略が最も盛んな時期だった。日本政府の移民政策は、実際に、その後東北の土地を占有するために準備された。移民政策は、表面的には開拓と呼ばれていたが、実は侵略であった。農民の家を奪取し、その土地を占領して行き、地元の東北農民に大きな苦痛を与えた<sup>65</sup>。

このようなことは、豊彦には解決できなかった。また、当時の帝国主義はあまりにも残虐であった。一人の力は小さすぎて、彼が戦争に反対する態度を示しても、日本人を改心させ、戦争を中止させることはできなかったのである。

豊彦は当時米国で講演を行ったが、在席していた中国人留学生が「全米同級生による抗日のスピール、北アメリカにおける中国同窓会会務欄報告の一つ：ミシガン州でのあらゆる中国人留学生は日本の宣教師賀川豊彦に反対する」という文章を發表し、豊彦に反対し批判した。豊彦の謝罪は日本軍閥のための言い訳であると思われていた。また、豊彦は、恨みを捨てようと主張していたが、この主張は、弱者は現実を受け入れよという主張と受け取られた。

労働運動を指導する時、豊彦は労働者が資本主義の奴隷にされてはいけないと主張し、反抗とストライキを通じて自分の權益を勝ち取ることを主張した。しかし、なぜ侵略された中国を同じように戦争を通して抵抗させないの

---

<sup>64</sup> 藤岡啓、『東省刮目論』、商务印书馆、1933年、84頁参照。

<sup>65</sup> 包艳伶、『《満洲农业移民入殖图》暴露日本侵华野心』、中国档案报、2014年、1頁参照。

か。豊彦は自分自身が暴力を振る人を止めることができないため、弱者は戦争を通じて抵抗しないように主張した。この観点は侵略された中国にとってどうだったのだろうか。

1937年7月7日、盧溝橋事件が勃発した後、豊彦は『涙にどうぐを告げる』と題した詩を作って謝罪した。

涙よ 涙よ 幼き日よりの 親しき涙よ しばらく別れていた 涙よ  
またお前と同居する時が来たね。真夜中に 夜明けに 真昼に 午後  
後に お前はしばしば私を訪ねて来るよね。

お前は私の兄弟「支那」の悲しいニュースを伝えては 私を罵って  
帰って行くね。私はお前の罵りをいくらでも受ける 私は卑怯者ではない。  
ただ私は日本を愛し 支那を愛している この二人の愛するものに  
喧嘩をさせたくない そのために 私は毎日苦しんでいるのだ。

私は失神者のようなまた幽霊のような存在をつづけている 人の罪  
を背負って 十字架にかかったイエスのように 私は国の罪を負わね  
ばならず 背負いきれない国の罪に私の頸はしづみ 頭はうなだれる。

涙よ 涙よ しばらく別れていた涙よ また お前と同居する日が  
来たね

1937年9月<sup>66</sup>

この詩から、豊彦が母国の日本を愛していると同時に、侵略された弱国である中国も愛していることがわかる。一個人や宗教が戦争に対して大きな影響と役割を果たしていないというこの中立的な態度は、彼の一貫した考え方であった。豊彦は特に中国で講演する際、しばしば謝罪している。しかし、米国では、謝罪は、中国人留学生にとって実際的な効果はあまりなかった。

豊彦は、宗教を通じて平和を求め、日中両国の架け橋になり、戦争をなくすことを目指していたが、彼は中国人民の立場に立っておらず、日中戦争において侵略された中国側への補償を考えていない。そのため、彼は本当の平

---

<sup>66</sup> 小南、前掲書、172頁参照。

和主義者ではない。彼は、中国に来てから中国に対して恥ずかしかったと語っているが、演説会での謝罪は、表面的で浅いものであると批判せざるを得ない。

#### 4. 反戦態度の転換ときっかけ

豊彦は変わらず戦争に反対し、平和を求めていたが、1943年の太平洋戦争の時に反戦連盟を脱退することにした。なぜ彼がこのように決定したのかを知るため、まず太平洋戦争の始まりから見る必要がある。

当時の日米間に衝突が起こったその起因は、主に、日本の東アジアでの軍事拡張であった。米国は中国を支援して日本を抑える対外政策を行っていたため、中国とインドに進軍する日本との関係が非常に悪化しており、一触即発の状態であった。日本政府は、宗教団体法を制定して、皇紀2600年を記念する大規模な祝賀活動を催した。国教である神道教で民心を凝集し、士気を奮い立たせ、英米に対する対抗を展開する意図があったのであろう。

キリスト教会は平和の使者を米国に派遣して調停しようとしていたが、失敗した。その後、ルーズベルトは米国にある日本のすべての資産を凍結するという命令を下した。教会は当時の状況を考えると、有力な人間を調停しに行かせる必要があると考え、その結果、豊彦を平和の使者として行かせた<sup>67</sup>。豊彦の反戦連盟の原稿に、このような内容があった。

私はこの際、日本基督教連盟の代表の一人として、一九四一年春、米国に渡り、日米のために努力したが、遂に微力にして効なく、私は憤慨して、日本に帰った。<sup>68</sup>

豊彦は、日本に戻っても戦争の勃発を積極的に阻止し、当時の米大統領や日本の近衛首相と会談し、戦争を阻止するために努力したが、結局成功せずに真珠湾戦争が勃発した。

---

<sup>67</sup> 陶波、『賀川豊彦与罗斯福总统——一位日本基督教領袖的对美和平工作』、基督教学术（第九辑）、2011年、7-13頁参照。

<sup>68</sup> 雨宮栄一、『暗い谷間の賀川豊彦』、新教出版社、2006年、297-298頁参照。

1943年11月、豊彦は国際反戦連盟組織の本部に信書を送った。送った信書にこんな話があった。

思ふに米国は日本人に対して差別待遇を過重し、日本移民の北国移住を厳禁し、その土地所有権を禁止し、…通商条約を破棄し、遂にはABCD包囲を以って日本を脅迫し、遂には資金凍結令を以って日本の経済を死滅に導くことを敢えてした。その瞬間、私は永年持つて居た平和論を太平洋上に捨てざるを得なくなった。<sup>69</sup>

これにより、反戦連盟からの脱退を決意した理由は、米国より日本への傷害が豊彦は耐えられなかったことであることがわかる。彼が列挙した理由から彼の平和思想を分析することができるだろう。

まずは移民問題と人種差別である。米国が日本人の大量移民を拒否するのは、実は根強い人種差別があるからである。日本は、1868年に天皇が「王政復古」の詔書を発布してから、西洋の政治経済モデルを全面的に模倣し始めた。改革初期の大鉦を振るうため、多くの農民が命をつなぐ土地を失った。さらに1898年にハワイが米国領となり、現地では多くの手仕事労働者が必要となった。当時の米国では、一定数の中国人に対抗するために、積極的に日本人労働者を導入した。教育レベルが高く、良質な栽培知識を持っている労働者たちは、すぐに米国で移民として多くの土地の経営者になった。日本の農民は、白人に認められ、尊重されようと願っていた。

日本政府も積極的に自国の顔を維持するため、色んなことを妥結した。しかし、日本は、多くの妥協と努力をしたにも関わらず、白人に認められなかった。逆に日本人移民者たちが努力すればするほど、白人は自分たちの權益に打撃が及ぶのではないかと心配した。その結果、白人は、「反日移民」を組織し、「君子協定」を制定し、また、「外国人土地法」を改正し、さらに移民を制限する「新外国人土地法」を制定した。日本人移民者は、米国で自分たちの土地を持つことができなくなり、精神的な打撃を受けた。米国政府はまた、日

---

<sup>69</sup> K-H・ジェル、前掲書、159頁参照。

本移民を糾弾して反日運動の号令をかけた文章を掲載している。彼らは各種の方法を通じてデマなどを捏造し、徹底的に日本人の移民を抑制したかったのである。1924年の「移民法案」の登場に伴い、日本移民の道は完全に断たれた。

以上のことからわかるように、米国の白人はアジア人の種族に対して実際には非常にネガティブであった。彼らが心配していたのは、アジア移民が彼らの利益を損なうだけでなく、ある民族の人口が一定の規模までに成長していたことである。そして、彼らはその民族の発展を制圧していた。これは白人が優越性を保つための行動であった。

豊彦は、このような環境でのアジア人奴隷化に抵抗するため、国際戦争反対者連盟本部に手紙を出し、戦争支持をすることになった。しかし、これはただの口実だと考えられる場合もある。豊彦は毎回の講演で自分が平和愛好者であることを表明し、日本の中国侵略に反対したが、中国が戦争に抵抗することを支持しないと主張していた。しかし、彼は日本が米国に攻撃された時、主張してきた反戦思想を完全に覆した。河島幸夫の著書によれば、「日本の戦争行為を欧米列強の植民地主義の侵略に対応するアジア民族解放のための正義の戦いである」<sup>70</sup>とあり、日本は、正義の戦争であると主張し、米国でアジア民族が受けた差別や不公平などを、戦争によって解放すると主張した<sup>71</sup>。

豊彦の手紙には、貿易条約の放棄についても言及されている。日本のアジア支配への野心や、海岸爆撃などの軍事活動により、中国にある米国の権益が損なわれたため、米国は1939年7月26日に日本との通商条約を破棄すると発表し、その条約は1940年1月26日に無効となった。1940年7月2日、米国は日本に対する戦略物資の輸出を禁止し、日本の侵略活動の拡大を抑制しようとしたが、1941年7月2日、日本は予定通りに南インドと中国に侵入することを決定し、それを達成するために英米と開戦することになった。それで、米国は日本に対して経済制裁を行い、日本の在米資産をすべて凍結し、日本

---

<sup>70</sup> 河島幸夫、『賀川豊彦と太平洋戦争 戦争・平和・罪責告白』、中川書店、1994年、22頁参照。

<sup>71</sup> 柴金璐、陈景彦『19世紀末20世紀初美国对日本移民政策的演变』、人口学刊、2013年、33-39頁参照。

への石油輸出を禁止した。ほとんどの戦略物資が輸入に依存している日本にとってはこれが致命的な措置であった。<sup>72</sup>「日本の経済を死滅に導くことを敢えてした。」豊彦は信書でこのように述べている。また、その中にはこういった話もある。「その瞬間、私は永年持って居た平和論を太平洋上に捨てざるを得なくなった。」

豊彦の行動を考察してみれば、彼が反戦思想を棄てたのはこの時点ではなく、米国が日本に戦略物資を提供しないと決定した時、彼はそれに反対し、反戦の思想をなくしていたかもしれない。米国は1940年7月2日に戦略物資の一部を日本に輸出することを禁止したが、日本が最も必要である石油と廃棄鉄は禁止されなかった。そのため、米国が最初に輸出禁止措置を徹底していないことがわかる。しかし、日本がその後南インドと中国に進出すると米国は石油の輸出を禁止した。

日本がそういった目に遭遇したのは、日本の侵略行為のためであるが、豊彦は信書で反戦思想を棄てようと主張する際に、こういった事実を知っていなかったであろうか。いや、彼は日米両国の政府と交流が多いため、当然知っていたと思われる。中立国であった米国が頻繁に日本の侵略拡大を妨げたのは、日本の野心が米国と他の国の権益を害したからである。しかし、豊彦は日本の侵略行為の現実を無視し、反戦思想を棄てたということを言い広めた。このようなことから、彼は本当の意味での平和主義者ではないと言うことが明らかにされたように思われる。また、米国が日本に対して厳格な制裁措置を行っても、日本は侵略活動を止めず、米国とヨーロッパ各国と全面戦争を始めた。この状況下において、豊彦は戦争を認め、日本軍隊の行為を弁護した。これは帝國主義と同じではないかと言わざるを得ない。

日本の帝國主義思想と軍事活動の計画は昔からあった。1854年と1856年に吉田松蔭は日本が発展していくために、このようにいていた。

「国家を富ませるには、すでに得られたものを確保するだけでなく、まだ手に入れていないものを得るべきだ。すぐに軍隊を強化させ、軍艦

---

<sup>72</sup> 唐长元、『论太平洋战争爆发前美国对日经济政策的演变』、文学教育、2014年、137頁参照。

と大砲を充実しなければならない。蝦夷を開拓し、諸侯を封立し、カムチャツカ半島を乗っ取り、オホーツク海を奪取し、琉球を暁に諭し、朝鮮に警告する。また、北は中国の東北まで割拠し、南は台湾とフィリピン諸島を略奪し、漸次進取の様相を示す」<sup>73</sup>。

吉田松陰は昔の思想家であるが、近代になってからの日本の対外拡張主義を参照すれば、松蔭以後も日本は侵略の野心をずっと持ち続け、強大な自国形成のため実際に侵略したと考えられている。<sup>74</sup> 豊彦は「私は真珠湾攻撃を好まなかったが、これがアジアを独立に導くだろうと考えた。」<sup>75</sup>と述べ、彼は戦争支持の態度を表していた。彼はアジアとアジア人のために戦うと言っていたが、実際は日本のためであったのである。当時の日本は、中国とアジア諸国への侵略で他国の権益を損ない、アジア最大の帝國主義の国家になったため、豊彦の主張はすべて崩れてしまったのである。また、1935年に9月5日に中立国であった米国に戦略物資禁輸が実施されたが、豊彦は米国の制裁措置しか言わず、その原因までは言及しなかった。わざと言及を回避したのではないかと推測できる。米国で体験した日本に対する制裁措置に堪えられなかったため、戦争を支持するようになったという彼の言は、ただの口実であり、成立しないと思われる。

## 結論

本論文では、賀川豊彦の人生に重要な意味を持った牧師2人との出会い(幼少期から中学時代)、また、その後洗礼を受けキリスト教徒となった彼の人生、これらの軌跡を眺めることで、彼の平和論の変遷を検討した。

豊彦の平和思想について言えば、これは二つの部分から構成されていたことがうかがえる。

---

<sup>73</sup> 吉田松陰、『吉田松陰先生幽囚録：訓註』、山口県教育会、1933年、119頁参照。

<sup>74</sup> 程文明、『从近代日本对外侵略扩张史看太平洋战争性质』、吉林师范大学学报（人文社会科学版）、2016年、61頁参照。

<sup>75</sup> ロバート・シルジェン、前掲書、297頁参照。

第一部分は、彼の幼少期の経験とスラム街での活動であった。豊彦は幼い頃から、経済的および精神的に苦しい環境の中で育てられた。また、自分が愛人の子供であったことから、幸せを感じる生活を送ったことがなく、自殺も考えたこともあった。なぜこの世界がそれほど冷たいのかが分からないという状況が続いたのである。そして、その時から、彼はこの世界を変えたいという強い信念を持つようになった。その後、豊彦は2人の米国の牧師からの導きにより、キリスト教徒となった。彼は、重い病気で寝込んでいても、信仰の力から自分の中に湧き上がるエネルギーを感じ、光と暖かさを他の人にも与えたいと思うのであった。実際、豊彦はスラム街で無私の活動を行い、庶民の心を温めるだけでなく、彼らの権益を積極的に勝ち取っていた。敬虔なキリスト教徒に出会ったため、彼の愛は国境を問わず、人種を問わなかった。演説の途中で中国の貧民を見て、彼らを助けたいと願ってやまなかった、また、底辺に暮らす日本人を助けるだけでなく関心のある中国の貧民を助けるために努力したのも、こういう彼の信仰心からであろう。日本社会だけでなく世界のすべてが一方に傾き、貧しい人々が基礎保障を受けなければ平和な世界はつくれないうちで思っていたからである。

第二の部分は、豊彦の戦争観の変化である。彼の戦争や暴力に反対する考えが芽生えたのは中学時代であった。彼は、平和演説のほかにも、反戦思想を中心とした様々な書物を出版したが、平和活動のため逮捕されることも幾度とあった。しかし、太平洋戦争勃発後、それまで中立国であった米国の態度と行動の転換や、一連の排日政策を経験することで、彼は、反戦連盟を脱退し、一部の戦争を支持するようになった。

豊彦は、日本をはじめとするアジアの人々が西洋列強の侵略と圧迫から逃れるため、一部の戦争を支持するようにと主張していた。特に彼の太平洋戦争中にしばしば表明された米国の批判、対米戦争の正当性の言論から見ると、豊彦が以前から強く主張していた絶対的な平和主義者のイメージが一步步崩れてゆく。このように豊彦の平和思想の修正により、彼は絶対的な平和主義者とは言えなくなると考えられるであろう。

豊彦は救貧事業をもっとも尊重するため、身の安全を顧みず政府に抵抗するガンジーのようにはできなかったとも言える。日本において、ナショナリ

ズムと平和主義の間に調和し難い矛盾が存在することが、平和主義促進の妨げとなっていたのは事実である。戦争によって、ナショナリズムは急速に高揚し、国家総動員の道具となった。そのため、民衆や政治家にとって、「平和主義」は忌むべき表現であった。実際に、戦時下の日本において、平和主義の支持者は極めて少ない。豊彦が平和主義の支持者であったにせよ、彼は、いかなる政治状況下においても必ず平和主義の思想を行動に移せたわけではなく、こういった側面に焦点を当てるならば、彼は決して絶対的な平和主義者ではなかったと言えよう。彼は、理性において、ナショナリズムと平和主義の関係をはっきり整理できたが、国の運命に関わる一国民としての義務感から、やむを得ず平和主義思想を修正したのではないだろうか。

戦時下の日本において、キリスト者は社会のマイノリティである。豊彦のような平和論を主張するキリスト者は更なるマイノリティである。豊彦が提唱した愛と平和の呼びかけと行動といった平和主義は、戦時中の国家神道を中心とするナショナリズムと国内の高圧政策から厳しく批判を受けた。そのため、豊彦が何回も逮捕された後、太平洋戦争勃発以後平和主義からナショナリズムへ転換したことは、彼の苦渋の選択の表明であるかもしれない。彼は、戦争加害者側の平和主義提唱者として、被害者側の民衆に謝罪する以外に何も実質的な行動を起こせずにいたことに対して、良心の呵責を感じただろう。

以上の考察から見ると、豊彦は絶対的な平和主義者ではないが、最初から最後まで自分の心を変えていないことには間違いない。豊彦はこの世界に愛をもたらし、世界に貧困がないことや戦争のない一つの世界へというのを願っていたのである。

今回本論文を執筆する際、豊彦に関する資料、特に中国国内の各種関連新聞や著作などの参考資料、また、日本でも中国でも、戦後の豊彦に関する研究が非常に少ないことを痛感した。今後の研究では、この点を克服しつつ、豊彦の戦後の思想と活動、またそれに対する中国人による評価をまとめることができれば、より価値のある研究になると思われる。

## 参考文献

1. 安保則夫、『ミナト、神戸、コレラ・ペスト・スラム』、学芸出版社、1989年
2. 雨宮栄一、『青春の賀川豊彦』、新教出版社、2003年
3. 雨宮栄一、『貧しい人々と賀川豊彦』、新教出版社、2005年
4. 雨宮栄一、『暗い谷間の賀川豊彦』、新教出版社、2006年
5. 雨宮栄一、『青春の賀川豊彦』、新教出版社、2003年
6. 賀川豊彦記念館出版会会員、『賀川豊彦入門—新しい時代を拓く先覚者』、賀川豊彦記念出版会、2014年
7. 賀川豊彦、『矛盾録』
8. 賀川豊彦、『賀川豊彦全集1』「イエスの宗教とその真理」、キリスト新聞社、1964年
9. 賀川豊彦、『賀川豊彦全集9』、キリスト教新聞社、1964年
10. 賀川豊彦、『賀川豊彦全集13』、キリスト新聞社、1964年
11. 賀川豊彦、『若き日の思い出』、旺文社、1955年
12. 賀川豊彦、『貧民心理之研究』、警醒社書店、1915年
13. 賀川豊彦、『新神戸』、友愛会神戸連合会、1918年
14. 賀川豊彦記念松沢資料館、『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』、株式会社新教出版社、2011年
15. 関西学院大学キリスト教と文化研究センター、『ミナト神戸の宗教とコミュニティー』、神戸新聞総合出版センター、2013年
16. K-H・ジェル、『賀川豊彦その社会的、政治的活動』、教文館、2009
17. 河島幸夫、『賀川豊彦と太平洋戦争 戦争・平和・罪責告白』、中川書店、1994年
18. 小南浩一、『賀川豊彦研究序説』、緑陰書房、2010年
19. 武藤富男、『評伝賀川豊彦』、キリスト新聞、1981年
20. 武内勝、『賀川先生の献身についての証し』、賀川豊彦の畏友・武内勝氏の所蔵資料より（4）- 賀川豊彦の魅力（鳥飼慶陽）、1956年
21. 浜田直也、『賀川豊彦と孫文』、神戸新聞総合出版センター、2012
22. 米沢和一郎、『Realistic Pacifist 賀川豊彦と中国』、明治学院大学キリスト教研究所紀要、2006年
23. 明治学院百年史委員会編、『明治学院百年史資料集』第2集「矛盾録」、明治学院百年史委員会、1975年
24. 三久忠志、『賀川豊彦伝—貧しい人のために闘った生涯』、文芸社、2020年
25. ロバート・シルジェン、『賀川豊彦愛と社会正義を追い求めた生涯』、株式会社新教出版社、2007年
26. 横山春一、『賀川豊彦傳』、キリスト新聞社、1951年
27. 庾凌峰、『戦前・戦中（1920—1945）の中国（台湾、香港を含む）における賀川豊彦の交流活動とその受容に関する研究』、2020年、（兵庫教育大学大学院博士学位

論文)

28. 庾凌峰、『戦前・戦中（1920-1945）の中国における賀川豊彦の受容に関する一考察』、2017年、(兵庫教育大学大学院修士学位論文)
29. 吉田松陰、『吉田松陰先生幽囚録：訓註』、山口県教育会、1933年

## 中国の参考文献

1. 包艳伶、『《满洲农业移民入殖图》暴露日本侵华野心』、中国档案报、2014年
2. 柴金璐、陈景彦、『19世纪末20世纪初美国对日本移民政策的演变』、人口学刊、2013年
3. 程文明、『从近代日本对外侵略扩张史看太平洋战争性质』、吉林师范大学学报（人文社会科学版）、2016年
4. 唐长元、『论太平洋战争爆发前美国对日经济政策的演变』、文学教育、2014年
5. 藤岡啓、『東省刮目論』、商务印书馆、1933年
6. 陶波、『贺川丰彦与罗斯福总统——一位日本基督教领袖的对美和平工作』、基督教学术（第九辑）、2011年
7. 王（著）、『賀川豊彦一』、明燈（上海1921）1930年第154期
8. W.Axling、『賀川豊彦伝』（続）-「明灯」、1933年
9. 尹树生、『世界合作運動史』、中華書局、1940年

